

『オセロー』要論

富原芳彰

一 「ジェラシー」(jealousy)の本義

イアーゴはオセローに、「ジェラシー」(jealousy)に用心せよと言った。

おお、閣下、「ジェラシー」にはご用心を。それは緑色の眼を光らせた怪物で、おのれが餌食とするものを弄んで苦しめるやつですからな。

O, beware, my lord, of jealousy;

It is the green-eyed monster which doth mock

The meat it feeds on. (III. iii. 165—7.)

これは、陰謀をたくらんでいる者はその陰謀を事前に相手に知らせるようなこととはしないであろうという常識を利用したイアーゴの策略であって、実は、オセローがジェラシーという緑眼の怪物の餌食となり、それに翻弄されて七転八倒する姿こそ、イアーゴがこの世でもっとも見たいと思ったものであった。

「ジェラシー」という英語は、ふつう、「嫉妬」と訳される。「嫉妬」という日本語の意味が、たとえば、「①男女人のやきもち。りんき。②優越者を憎悪する感情。ねたみ。そねみ。」(『広辞苑』)であるとすると、シェイクスピアの『オセロー』について考えようとしているわれわれは、そこで用いられている「ジェラシー」という英語をただちに「嫉妬」と訳すことに躊躇を感じる。もしここで安易な訳をして、たとえば、「オセローは嫉妬に駆られて妻を殺した」というようなことを言ったらとすれば、この作品の真意を誤解する大きな原因を作ることになる恐れがある。オセローはジェラシーには捉えられたが、彼を捉えたものは「男女間のやきもち。りんき。」とはかなり異なるものであった。「優越者を憎悪する感情。ねたみ。そねみ。」という「嫉妬」の第二の意味は、オセローに即して考えた場合、まったく無関係とは言えないかも知れないが、縁遠い。たとえば、オセローはイアーゴーにはかられて、最愛の妻デズデモーナがキャシオーと不義を働いていると思ひ込まされ、嫉妬に駆られて妻を殺してしまうが、殺してしまったあとで、イアーゴーの奸計があばかれ、オセローは後悔のあまり妻のあとを追って自殺した、というようなこの作品の大意の取り方は、要するに、この作品を一種の情痴劇にしてしまうもので、作品の真意を誤るものである。『オセロー』は、いわゆる「嫉妬」の悲劇ではない。そこで言われている「ジェラシー」は、日本語の通常の意味における「嫉妬」と同じものではない。

イアーゴーはこの文の最初に引いた彼の言葉にすぐつづけて、次のように言っている。

女房を寝取られても、おのれの不運の確証をにぎり、裏切った女に未練を残さぬ男は、天福を得た仕合せ者です。しかしです、ぞっこん惚れた恋女房だが、どうもあやしいと思ひ、くさいと疑いながら、それでも強い愛着がど

うしても絶てぬと来た日には、こいつは實際、時々刻々が地獄の苦しみでしようからな。

That cuckold lives in bliss

Who, certain of his fate, loves not his wronger;

But, O, what damned minutes tells he o'er

Who dotes, yet doubts, suspects, yet strongly loves. (III. iii. 167—70.)

イアーゴのこの言葉の後半が緑眼の怪物ジェラシーにさいなまれる男の様態を叙していると見なければならぬ。『ジェラシー』という英語自体が、シェイクスピアの時代と今日とは、意味の上で多少のずれを生じている言葉である。『ジェラシー』の訳語としての「嫉妬」は、シェイクスピアの時代の英語としての「ジェラシー」よりは、今日の英語としての「ジェラシー」に、さう適している。シェイクスピアの時代における「ジェラシー」の基本的かつ一般的な意味は、suspicion である。それは「疑念」とくに「不吉を予想する疑念」の意味で一般的に使われる言葉であった。たとえば、"jealousy what might befall your travel" (*Twelfth Night*, III. iii. 8) は「旅の途中であなたの身にどんなことが起るかも知れないという疑念（あるいは心配）」の意味である。『ベニス商人』のポーシァは、彼女の念願どおり、バツサーニオーが三つの小箱のくじに成功し、彼女が彼の妻になれることが決定した瞬間、歓喜して次のように傍白する (*The Merchant of Venice*, III. ii. 109—11)。

How all the other passions fleet to air,

As doubtful thoughts, and rash-embraced despair,

『マヤロー』要論

And shuddering fear, and green-eyed jealousy!

ほかの気持はみんな雲散霧消、あれこれの不安やせっかちな絶望、身の震える恐れや緑色の眼をした疑念などみんな！

「緑色の眼をした」(green-eyed)とこう形容詞がこころでも用いられている。それは jealousy の枕詞のようなものであるが、怪獣の眼と、その怪獣が心の中に棲みついたときの人間のぶきみな眼光とを思わせる効果がある。ポーシアの言う“green-eyed jealousy”も、もちろん、「嫉妬」でもなく、「やきもち」でもない。自分の将来についての不安にみちた疑念のことである。

相愛の男女の間におけることとして「ジュラシー」ということが言われた場合、それは、当然、もっともすれば、自分に対する相手の誠実や貞操を疑う心を意味する。そこには、男女間の愛憎に特有の、情痴的なねたみやそねみ、あるいはやきもちも、当然、しばしば混入して来るであろう。しかし、本質的なものと随伴的なものとは分けられなければならない。相愛の男女の間でのこととしての「ジュラシー」も、その本質は「疑念」である。シェイクスピアの時代の英語としての jealousy の基本的かつ一般的な意味が suspicion である、さらには情熱的な suspicion である、ということとは、あるいは単純な初歩的知識であるかも知れない。しかし、それが安易に「嫉妬」と翻訳され、「嫉妬」というその訳語が、もし情痴的感情という概念へわれわれを誘導する恐れがあるならば、われわれはやはり警戒しなければならない。少くとも、『オセロー』という作品を正しく理解しようとするならば、われわれは「ジュラシー」即「嫉妬」という安易な結合をはじめに断ち切っておく方が安全である。

相愛の男女の間でのジュラシーは、自分に対する相手の誠実や貞操を疑う心であるとするならば、ジュラシーに捉えられた者は、相手に対して、愛しつつ疑い、疑いつつ愛するという、一種の葛藤的心理状態にはいる。その場合にも、もし相手が自分に対してまさしく不貞であるという確証が得られたならば、そのことよって二人の間の愛憎にどのような変化が生ずるにしても、ジュラシーだけは消えるはずのものである。イアーゴーが言ったように、妻の不貞について確実な証拠をにぎり、そのことについて揺がぬ確信を持ち、その結果、もはや妻への愛がなくなってしまった男は、とにかくジュラシーの桎梏からは解放される。

オセローとデズデモーナとは、打算や政略によってではなく、純粹に恋愛によって結ばれた夫婦であった。人種も、年令も、肌の色も、身分も、生まれ育った環境も、それらすべてのことを無視して、「自然のあらゆる法則に反する」(“against all rules of nature”) (T. iii. 101) かのごとくにして、二人を結びつけたものは、二人が相互に持った愛だけであった。このことは、『オセロー』という劇の最初において設定されていることであり、この作品を理解する上において欠くことのできない、基本的な条件である。デズデモーナの貞操に対するオセローの疑いがオセローに対して持った意味は、この基本的な条件の下で考えられなければならない。

イアーゴーの言うとおり、ジュラシーの苦痛は、それに拮抗する愛が存在することによって生ずる。ジュラシーの苦痛は、それに拮抗する愛が強ければ強いほど大きくなる。いずれにしても、ジュラシーの苦痛は、愛と疑いとが共存することから来る。したがって、愛と疑いとの違いが消滅すれば、ジュラシーの苦痛は消える。愛を消去してしまえば、相手が不貞であるかどうかなどということとはもはや他人事である。そもそも、愛の存在しないところに、

貞不貞の問題が、したがって、相手の貞操についての疑念であるジュラシーそのものが、果して起りうるものであるかどうか疑わしい。愛が消えるということは、形式的には単純なことであるが、他方、疑いが消える消え方には二通りの様式がある。疑いであったものが真実に転じて消える様式と、疑いが事実無根であるとわかつて消える様式とである。疑いは、結局、確信となることによって消えるのであるが、疑いが肯定されて確信となる場合と、疑いが否定されて確信となる場合とがあるわけである。疑っていたことが真実であるとわかつて確信に転じた場合、それと同時に愛も消えてしまえば、そういう男は、イアーゴの言う「天福を得た仕合せ者」となる。同じ場合に、愛が消えないことも形式の上ではありうるが、そこに残る愛は虚数のようなもので、そのままでは現実性がない。疑いが事実無根とわかつて消えた場合、それと同時に愛が消えることは理屈に合わない。人間の感情はかならずしも理屈どおりに動くものではないから、この場合にも愛が消えるということが現実に起らないという断言はできない。疑いが事実無根とわかつて消え、愛がほとんどそのままに残るといふのは、理屈の上から言えば、もっとも合理的である。ジュラシーの苦痛は、同時にそこに存在するところの愛との相関において起こる。それは、疑いと愛とが共存するところに起こる。したがって、そのいずれかが不在ならば、ジュラシーの苦痛というものは起こらない。ジュラシーに用心しろと言われて、オセローがイアーゴに答えた次の言葉は、きわめて合理的である。

いや、イアーゴ。おれは疑う前にまず見る。疑いが生じたら、証拠を得る。証拠が得られたら、することはただひとつ——ただちに愛を捨てるか、疑念を捨てるか、そのいずれかだ。

I'll see before I doubt; when I doubt, prove;

And on the proof, there is no more than this,——

Away at once with love or jealousy ! (III. iii. 189—92.)

オセローは、この言葉のすぐ前のところで、おれは疑いを生じたらかならずその疑いを解かずにはおかない男だ、という意味のことを言っている。

No; to be once in doubt

Is once to be resolved. (III. iii. 179—80.)

というのがそれである。要するに、オセローは、デズデモーナが彼に対して不貞であるのではないかという疑いでもし生じたならば、彼はその疑いの真偽のほどを明らかにする証拠を求め、もしその疑いが真実であるとわかった場合には、ただちにデズデモーナを捨て、もしその疑いが事実無根であるとわかった場合には、疑念をきっぱりと捨て去ると言っているのである。しかし、オセローは、ここで、一つの重要なことに気づいていなかった。オセローは、すべての疑念には、その疑念の真偽を明確にする証拠がかならず得られるものと信じていた。すべての疑念は、証拠を求めてそれを得ることによって、かならずその真偽を定めることができるものであると彼は思っていた。この世には、証拠によってその真偽を判定することができるというような種類のものでない疑念もあるということをおセローは知らなかった。ここにオセローの最大のおやまちがあった。妻が不貞を働いた（不貞の女である）という証明はできるかも知れない。しかし、妻が不貞を働かなかった（不貞な女ではない）という積極的な証明はできないのである。無

限の証明を要するということは、事実上、証明ができないのと同じことである。有罪であると証明できないから無罪とするということはできるが、無罪であるということを経極的に証明することはできないのである。デズデモーナが不貞であるのではないかという疑念を真に否定すべき証拠は、彼女が不貞ではないということを経極的に立証する証拠であるが、そのようなものはこの世にありえないのである。デズデモーナが不貞ではないということは、オセローにとっては、彼女が不貞であるという証拠がなく、オセローが彼女を不貞ではないと信じるかぎりにおいてのみ保証されるのである。デズデモーナが不貞でないということを真に証言できるのは、神を除けば、デズデモーナ本人ただひとりである。しかし、たとえデズデモーナが自分が不貞でないことを証言したとしても、オセローが彼女の言葉を信じなければ、オセローの疑いは依然として消えないであろう。オセローに起こった疑念は、証拠をつかみ、その証拠によって黒白いずれかに決着をつけようとするような性質のものではなかった。それはオセローに信ずるか否かを問ひ、そこのみ解決のありえた問題だったのである。

オセローは、イアーゴーによって、デズデモーナに関する疑念 (palsy) を注入されるまで、彼女を絶対的に信じ、絶対的に愛していた。彼は、イアーゴーによってくだんの疑念を注入される直前にも、デズデモーナの後姿を見送りながら、次のように言った。

おれの霊が地獄に墮ちてもいい、おれはおまえがかわいい。もしおれがおまえを愛さぬときが来たら、天地はふたたび混沌にかえる。

Perdition catch my soul,

But I do love thee I and when I love thee not,

Chaos is come again. (III. iii. 90-93.)

この言葉は、デズデモーナを愛することがオセローに対して持っていた意味をわれわれに告げるものである。ハムレットは、彼の母親を信じられなくなったとき、自然の秩序、宇宙の構成が彼の眼前で崩れ去るのを見た。リアは彼の娘たちに裏切られた（コーディーリアには裏切られたと錯覚した）とき、彼の世界がふたたび暗黒と混沌に転落するのを体験した。オセローは、同じようにして、彼がデズデモーナへの愛を失なったとき、彼はふたたび混沌と化した世界の中へ陥没して行くであろう。これを逆に言うならば、オセローは、彼の世界を保持する支点を、彼のデズデモーナに対する愛の中に持っていたのである。彼がデズデモーナを愛さなくなったときは、彼自身も二分法によって、彼がデズデモーナの背信を確信したとき以外にはありえない。彼がデズデモーナを愛さなくなったときは、彼がデズデモーナの不貞を信じたときであり、そのときには、オセローの世界を支える枢要が破壊され、彼の世界の構築は崩れ落ちて、彼は混沌の中へ落ちて行くのである。オセローはデズデモーナを愛することにおいて、彼が世界の真实性を信ずることを可能にする拠点と保証とを得ていたのである。オセローにとって、世界の真实性と価値とは、デズデモーナの真实性と価値とを機軸として、その上に築かれているのであった。オセローのデズデモーナに対する愛は、彼にとって、そのような意味を持つものであった。

イアーゴは、オセローの心中にデズデモーナの貞操に関する疑念を生ぜしめ、愛しつつも疑い、疑いつつも愛する苦しみを彼に与えようと企てた。それが、イアーゴがオセローに対して企てた復讐の様式であった。しかし、人

間は、結局、各自の尺度を超えられず、各自の容積以上には出られない。イアーゴーは、彼がオセローに与えようとしたものの意味を、彼の尺度をもってしか測れなかった。イアーゴーがオセローに期待した苦しみは、イアーゴー自身も知っていたところの、いわば情痴の意味での嫉妬の苦しみでしかなかった。しかし、イアーゴーは、デズデモナーに関する疑念をオセローに与えることによって、彼自身はまったく気づかぬことであったが、実際には、彼の意図の範囲を超え、彼の理解の限界の彼方にあるものをオセローの中に生ぜしめた。オセローは、イアーゴーによって、イアーゴー自身が意図したものとまったく異なる意味を担うものとしての疑念をデズデモナーに対して抱かせられることになった。イアーゴーとオセローとは、両者が同一の平面に立って対話をしていてのではない。イアーゴーは彼の次元で話し、オセローは彼の次元で受取った。イアーゴーが彼の次元で話している言葉は、それがオセローによって受取られたとき、イアーゴーの次元とは異なる次元における意味をオセローの中で帯びた。イアーゴーとオセローとの間には、生きることの意識において越えがたい隔絶があった。たとえば、男女の間の愛をすべて肉欲という言葉でしか考えることのできないイアーゴーには、オセローが彼のデズデモナーへの愛にこめていた意味は、認識も理解もできないものであった。したがって、イアーゴーは、彼のたくらみが成功した場合にそれがオセローの中に作り出す効果を正しくは予想しておらず、それがオセローをいかなる行動に導くはずのものであるかを知っていなかった。イアーゴーは、彼のたくらみが成功した場合に、オセローはイアーゴーが知っている範囲においてジェラシーの苦痛を味わうであろうと思っていた。それ以上のことに想到することは彼の能力の限界を超えていた。オセローがジェラシーのためにデズデモナーを殺すにいたるであろうということは、彼の予想の中にはなかった。現に、イアーゴー自身

が自分の妻の不貞を疑い、その苦しみに（彼の次元で）さいなまれてはいるが、彼は一度も彼の妻を殺さなければなら
ないと思つたことはなかった。イアーゴーがオセローに与えたいと思つたものは、「眼には眼を」の原理に立つ同態
復讐であり、それ以上のもではなかった。オセローによるデズデモーナの殺害は、イアーゴーの予期の外に出た事
態であった。彼はその惨事を知つても、その意味を理解できなかった。イアーゴーは完全に当惑し、ついに言葉を失
つた。

二 イアーゴーにおける復讐の動機

イアーゴーは、妻を愛しつつ疑い、疑いつつ愛するジェラシーの苦痛を、オセローに与えようと企てたが、彼はそ
のようなジェラシーの苦痛を彼自身知っていた。イアーゴーは彼の妻エミリアの貞操をオセローに盗まれたのではな
いかという疑いを持っていた。

また、世間のうわさでは、やつ「オセロー」はおれの寢床に忍び込み、おれのする仕事をしてくれたという。ほ
んとうかどうかは知らぬ。だが、おれは、そういうことでは、ただ疑いがあるというだけでも、あたかも確証が
あつたかのごとくに行動する男なのだ。

And it is thought abroad, that 'twixt my sheets

He has done my office: I know not if't be true;

But I, for mere suspicion in that kind,

Will do as if for surety. (I. iii. 393-6.)

私は、前節で、妻の不貞は証明できるかも知れないが、妻が不貞でないということは積極的には証明できない事柄であると述べた。イアーゴーも妻のエミリアが不貞でないという積極的な証拠はもちろん持てない。この場合には、エミリアが不貞であるというわさが世間に流れている。世間のうわさであるから、それは正しい証拠にはならない。すなわち、エミリアが不貞であると証明はされていない。一方、世間にそういううわさが流れているという事実の存在は、エミリアが不貞ではないと信ずることを妨げる。エミリアが不貞であると証明されているか、あるいは、エミリアが不貞でないと信じられていけば、疑いは起こらない。いまはそのいずれでもないから、イアーゴーはエミリアの貞操に関する疑念に捉えられ、それから脱却できないことになる。疑念というのは、解決しない心、いずこにも決着すべきところを見出していない、いわば、中吊り状態の心を意味する。イアーゴーの心は、実は、エミリアについて、彼女が不貞であるとも、不貞でないとも、断定できない状態にあった。そのようなとき、あたかもエミリアの不貞を確証するものがあつたかのごとくに彼が彼の行動を選ぶのは、まったく彼の自由によることであつて、イアーゴーという性格の特徴をそこに見、それをその原因とする以外に説明のしようがない。

イアーゴーによつてあたかも真実であるかのごとくに想定された（真実であるかも知れず、真実でないかも知れないものを、独断的に真実であると決められた）エミリアの不貞は、イアーゴーに、彼に即した仕方、大きな苦痛を与えた。エミリアの不貞の相手はオセローである。イアーゴーは、男女の性交の場面については、常に、生々しい想像をする。オセローとエミリアとが不義の交わりをしている情景の想像は、彼に「毒でも飲まされたように、はらわ

たが焼けただれる」思いをさせた(H. I. 305—6 参照)。イアーゴは同じ思いをオセローにもさせたいと思った。

妻エミリアとオセローとの不義の關係について、そういうことでは自分は疑わしいことは真実のこととして扱うと述べた(一一ページの引用)あと、イアーゴはすぐにつづけて次のように言う。

やつ〔オセロー〕はおれを信用している。やつに對しておれの目的を遂げるのにはそれだけ都合ってわけだ。キャシオーは二枚目だ。そこで、待てよ、よく考えてと。あいつの地位を奪い取って、一石二鳥てな具合にしておれの恨みを晴らすには——えーと、えーと——どうしたらいいかな。しばらく様子を見てから、オセローの耳に、あの男は奥さんに少しなれなれしくしすぎるてなことを聞かせてやる。あいつは男前といい、当りのなめらかさといい、疑われやすいところが、女をよろめかせる男のようにできている。あのムーア人は腹黒いところのない、あけっぴろげの人間で、うわべが正直そうに見えれば、それだけで正直者と思ひこむ。鼻面をとられればどこへでもおとなしく引かれて行くのは、まったく驢馬同然だ。そうだ、わかったぞ。胎児ははられました。あとは、地獄と闇夜の力がこの化けものに日の目を見せるのを待つばかりだ。

He holds me well;

The better shall my purpose work on him.

Cassio's a proper man: let me see now:

To get his place and to plume up my will

In double knavery—How, how?—Let's see:—

After sometime, to abuse Othello's ear

That he is too familiar with his wife.

He hath a person and a smooth dispose

To be suspected, framed to make women false.

The Moor is of a free and open nature

That thinks men honest that but seem to be so,

And will as tenderly be led by the nose

As asses are.

I have't. It is engender'd. Hell and night

Must bring this monstrous birth to the world's light. (I. iii. 396—410.)

イアローのこの独白に言及して「*ソ・ト・コールリック*が「これは「動機なき悪意の動機なきを示してゐる」(The last speech, Iago's soliloquy shows the motive-hunting of motiveless malignity.)と評つゝることは有名である。コールリックはまた「この独白そのものを「悪魔的」(fiendish)と言つゝ、イアローを「まったくの悪魔ではなかつたただ、悪魔にまつゝを近づ存在」(a being next to devil, only not quite devil)である」と述べてゐる」(T. M. Raysor (ed.): *Coleridge's Shakespearean Criticism*, I. 49 参照)。

イアローのこの独白が「悪魔的」であるかどうか、イアローが「悪魔にまつゝも近い存在」であるかどうかは、

「悪魔」とか「悪魔的」とかいう言葉でコールリッジがここで意味したものが不明確であるから、厳密な議論はできない。イアーゴーがこの独白で示しているものが「動機なき悪意の動機さがし」であるというコールリッジの説については、われわれはこれを首肯することができない。イアーゴーの悪意はむろん否定できないが、彼がオセローに対して復讐を企てたことに動機が欠除しているというのは、コールリッジが何かを見落しているとしたか考えられず、また、イアーゴーがそこで何かをさがしているとするれば、それは動機ではなく、方法であると見るべきである。イアーゴーを行動における緻密な計算家であるかのごとくに考えるのも誤まっている。彼は、事前に計画を練り、次にそれを実行する、というような形の行動をする人物ではなく、むしろ、時々刻々に変化する事態に即応して、その都度、彼の利己的目的のためにもっとも適した手段を選ぶことに巧妙であるという人物である。いわば、彼には戦略はないが、彼は戦術には長じている。彼の臨機応変の戦術は、決して彼の目的の変更を意味するものではなく、ましてそれに応ずる動機の適行的設定の企てを意味するものでもない。

イアーゴーがオセローに対して復讐を企てた動機は、明言的に示されている限りについてみても、十分に存在している。

第一に、そしてこれが根幹的なものであるが、イアーゴーは、自分がオセローの副官に昇進させられなかったことにおいて、オセローから不当の評価と扱いを受けたと感じている。「年功序列」(“old gradation”)を無視し、多くの戦場において立証した彼の軍人としての真価を尊ばず、「国の三人の有力者たち」(“three great ones of the city”)が彼をその地位に推薦した事実を軽んじて、オセローはキャシオーを彼の副官に取り立てた。イアーゴーに

とっては、オセローが彼以外の人物を副官に選んだこと自体が彼に對する不当の仕打ちであるから、彼のかわりに選ばれた人物が誰であるかは、本来、二次的な問題である。しかし、この場合は、二次的な問題が一次的な問題を倍乘的に悪化させる。オセローは、イアーゴリーのかわりに、彼の占めるべき地位を一体いかなる人物に与えたか。

それが、実に、算術の大先生、マイクル・キャッシュオーと名のるフローレンス人、美人の女房をもらって浮ばれぬ羽目に遭いそうな野郎なのだ。戦場に出て一分隊を指揮したこともなく、戦闘体形の立て方など、村娘も同然にご存じない。ご存じなのはただ机上の空理空論だけで、それなら衣冠束帯のお公卿さんでも負けずに弁じられようというものだ。喋るばかりで実戦は知り申さずという軍人さんだ。しかるにだ、いいか、その彼が選ばれた。そしてこのおれは、ローツ島からサイブラス島、その他ありとあらゆる戦場で立証した真価を大将はその目で見てゐるはずなのに、貸し借り勘定のこの帳づけ屋の風下に立たされて、帆もあげられず、しょぼんとしていなければならぬのだ。このそろばん野郎めがめでたく副官の地位におさまり、このおれは、あきれはてたことに、黒んぼ閣下の旗持ちちというていたらくだ。

Forsooth, a great arithmetician,

One Michael Cassio, a Florentine,

** A fellow almost damn'd in a fair wife;*

That never set a squadron in the field,

Nor the division of a battle knows

More than a spinster ; unless the bookish theoretic,

Wherein the toged consuls can propose

As masterly as he : mere prattle, without practice,

Is all his soldiery. But he, sir, had the election :

And I, of whom his eyes had seen the proof

At Rhodes, at Cyprus and on other grounds

Christian and heathen, must be be-lee'd and calm'd

By debtor and creditor : this counter-ester,

He, in good time, must his lieutenant be,

And I—God bless the mark !—his Moorship's ancient. (I. i. 19—33.)

〔*を付した一行は本文批評上の疑義があり、解釈もまちまちである。拙訳は仮りに右のごとくにした。〕

イアーゴーがオセローを憎み、彼に対して復讐をたくらむ第一の理由は、劇の冒頭におけるイアーゴーの右の言葉の中にこれを見ることができる。イアーゴーは、自分の真価がオセローによって正当に評価されなかったことに憤懣をいだき、自分を不当に扱ったオセローに憎しみを持った。オセローがイアーゴーのかわりに副官に選んだ男が、イアーゴーの眼から見た場合に、彼よりはその地位に適さない男、彼が職場で軽蔑する男であったことは、彼の憤懣をいっそう高めるものであった。イアーゴーはキャシオーに対して、現場の軍人が軍事理論家にむける不信と軽蔑とを典

型的に示している。

オセローがイアーゴーのかわりに副官に選んだ男がキャッシュオーであったことがイアーゴーの憤懣をいっそう募らせたもう一つの理由は、キャッシュオーがベニスには他国人であるところのフロレンス人であったことである。イアーゴーは自分の地位を外国人に奪われたのである。

オセローは、キャッシュオーを彼の副官に取り立てたことによって、彼自身はまったく知らずに、イアーゴーの中に二重、三重の憤懣を生じさせた。イアーゴーのこの憤懣が、彼をしてオセローを憎ませる原因となり、ひいては彼をしてオセローに対する復讐を企てさせる主要な動機を形成した。

われわれは、すでに、イアーゴーが彼の妻エミリアをひそかにオセローに盗まれたのではないかという疑いを持っていたことを述べた。イアーゴーにとっては、この疑いは真実に等しく、そのことを思っただけで、彼は毒ではらわたを焼かれるような苦しみを覚えた。イアーゴーがオセローに対して復讐を企てた第二の動機がここにある。この第二の動機に関連してイアーゴーが述べているもう一つのこと、それはイアーゴーが一度しか口に出していないことであるが、われわれは無視できない。それは、イアーゴーもデズデモーナに懸想し、彼女に対して情欲を燃やしていたということである。イアーゴーにおける第二の動機は、彼自身の言葉で次のように語られている。

キャッシュオーが彼女〔デズデモーナ〕に惚れていること、これはまずまちがいない。女の方でもやつに惚れていること、これも当然で、大いにありうることだ。あのムーアのやつは、おれには我慢のならぬ男だが、誠実で、情が深く、高潔な人柄で、どうやらデズデモーナには大事な最愛の夫てなことになるだろう。ところで、おれもあ

の女には惚れている。一途に情欲からというのではない、(いや、その罰当りの心がまったくないとはいいかねるかも知れぬが)、それよりも、おれの恨みが晴らしたいからだ。というのは、どうやらあの好色のムーアのやつめ、おれの馬の鞍にごっそりまたがったらしい疑いがあるからだ。その情景をちらっと思い浮べただけでも、おれは、毒物でも飲まされたように、はらわたの焼けただれる思いがする。こうなったら、あとは五分と五分の取引で、女房の恨みは女房で返してやるまで、おれの胸の中は絶対におさまらない。あるいは、そうまでうまくいかないにしても、少くともあのムーアのやつをはげしい嫉妬に追い込み、思慮分別ぐらいではどうにもならぬやうにしてやるのだ。

That Cassio loves her, I do well believe it;

That she loves him, 'tis apt and of great credit:

The Moor, howbeit that I endure him not,

Is of a constant, loving, noble nature,

And I dare think he'll prove to Desdemona

A most dear husband. Now, I do love her too;

Not out of absolute lust, though peradventure

I stand accountant for as great a sin,

But partly led to diet my revenge,

For that I do suspect the lusty Moor

Hath leap'd into my seat; the thought whereof

Doth, like a poisonous mineral, gnaw my inwards;

And nothing can or shall content my soul

Till I am even'd with him, wife for wife,

Or falling so, yet that I put the Moor

At least into a jealousy so strong

That judgement cannot cure. (II. i. 295—311.)

イアーゴーがオセローを憎み、オセローに対して復讐を企てた動機は、明言的に示されている限りでも、以上に観察したごとく、二つあった。そして、それら二つの動機は、それぞれに単純ではなく、複合体をなしているが、それぞれの中核をなしているものは、オセローが彼の職業上の能力と価値とを正当に評価しなかったことに対する彼の憤懣と、オセローが彼の妻エミリアの情を盗んだこと（イアーゴーにとっては事実には等しい）に対するオセローへの恨みとである。これらの二つのものは、一見別種のもののように見えるが、そうではない。これらの二つのものの背後にはそれらに共通する一つのものが横たわっている。それは、彼の自尊心あるいは優越感を傷つけるものに対するイアーゴーのげいしい嫌悪である。この点については、A・C・ブラッドリーが適切な叙述をしているので、それを引用することにする。イアーゴーは平生常に羨望の念に燃えていたわけでもなく、また他人に対して、これを常に

潜在的競争者と考へて積極的に敵意をいだいていたわけでもないと言へたあと、ブラッドリーは次のごとく書いてゐる。

しかし明瞭なことは、イアーゴは彼の誇りないしは自尊心に触れてくることに對しては、どんなものにも非常に敏感だということである。彼を虚栄心の強い男と呼ぶならばきわめて不当なことになるであらうが、しかし彼は自分自身を高く買つており、他人に對しては大きな侮蔑の念を持っている。彼はあるいくつかの点において自分が他人より優れていることをはっきりと意識している。そして他人が彼よりも優れているようなものについては、彼はその価値を信じないか、あるいはそれを輕蔑する。彼の優越感を動揺させるかあるいは傷つけるものは、何事によらずただちに彼をいら立たせる。そしてその意味において彼ははげしい競争心を持っている。

But what is clear is that Iago is keenly sensitive to anything that touches his pride or self-esteem. It would be most unjust to call him vain, but he has a high opinion of himself and a great contempt for others. He is quite aware of his superiority to them in certain respects; and he either disbelieves in or despises the qualities in which they are superior to him. Whatever disturbs or wounds his sense of superiority irritates him at once; and in *that* sense he is highly competitive.

(A. C. Bradley: *Shakespearean Tragedy*, p. 180.)

オセローによるキャシオーの副官選任はイアーゴの自尊心あるいは優越感を傷つけた。オセローに妻を寝取られたという疑いも、同様に、彼の自尊心あるいは優越感を傷つけた。それは彼が他人に出し抜かれたことを意味し、その

上人々から憫笑を買うことを意味した。そしてそれはイアーゴーにはもともと耐えがたいことであった。

三 イアーゴーのジュラシー

われわれは、第一節において、オセローのジュラシーの意味を正しく捉えるためには、「ジュラシー」即「嫉妬」という、言語の国境を無造作に跳び越える安易な結合に警戒すべきことを述べ、そのような結び付きを一応断ち切っておいた。そして、ジュラシーの本質は疑念であることを強調した。われわれはまた、第二節において、イアーゴーにおける復讐の動機を明らかにしたが、そこにおいて、彼の個々の動機の背後に横たわるものとして、自尊心あるいは優越感をおびやかしあるいは傷つけると感じられるものに対するイアーゴーのはげしい嫉妬と敏感な警戒心が認識された。ここで、われわれは、改めて、「ジュラシー」(jealousy)という言葉の一般的な定義を求めたくなる。

『オックスフォード英語辞典』(O. F. D.)は jealousy に五つの主要な意味を区別している。それらの五つの意味は、いずれも、われわれの当面の問題に無関係であるとは言えないが、それにもっとも密接な関係にあるのは、右の辞書が与えている四番目と五番目の定義である。その四番目の定義とは次のごときものである。

The state of mind arising from the suspicion, apprehension, or knowledge of rivalry. (競争者がうらやまう疑い、恐れ、あるいは認知から生ずる心の状態。)

この定義には、さらに、二つの下位分類が与えられている。そのうちの一つは、次のものである。

a. in love, etc.: Fear of being supplanted in the affection, or distrust of the fidelity of a beloved person,

esp. a wife, husband, or lover. (愛などにおいて。愛する人、とくに、妻、夫、恋人の愛情において自分が他人に押しつけられているという心配、あるいはそういう人の信義に対する不信の念。)

まう一は、次のものである。

b. in respect of success or advantage : Fear of losing some good through the rivalry of another ; resentment or ill-will towards another on account of advantage or superiority, possible or actual, on his part ; envy, grudge. (成功あるいは有利性に関して。他人を競争者を持つことによつて何かの益を失うのではないかという恐れ。他人の持つ可能的あるいは現実的有利性あるいは優越性のゆえに他人に対していさぐ恨みあるいは悪意。〔同意語として、envy と grudge とが与えられている。〕)

五番目の定義は、

Suspicion ; apprehension of evil ; mistrust.

であつて、疑念あるいは猜疑心、不吉を予想しての恐れあるいは心配、不信あるいは疑惑、などという意味で *jealousy* という語が使われたことのあることを明らかにしている。(今日ではこの意味は「方言的」であると、該辞典は告げている。) この五番目の定義は、アニアンスの『シェイクスピア語彙辞典』(C. T. Onions : *A Shakespeare Glossary*) にも、そのままの形で再出しているものである。

『オックスフォード英語辞典』が *jealousy* に与えた定義のうち、われわれの当面の問題にとくに密接に関係していると思われるものを右に引用したが、これらの定義に照らして見るとき、われわれは、イアローにおいて彼の復讐

の動機の背後に横たわり、彼の動機そのものの原因をなしているものを、その言葉のさまざまな意味を含めて「ジュラシー」と呼ぶことができる。『オセロー』におけるイアーゴアの行動の原動力はジュラシーである。彼の精神の相貌はまさしく緑眼の怪物であった。イアーゴアがオセローに「ジュラシーに用心せよ、それは緑眼の怪物で、それが餌食とするものをさんざんに弄んで苦しめるものだから」と言ったあの言葉は、観客にはあきらかな、ドラマティック・アイロニーを含んでいる。

四 オセローの異国性と英雄性

ムーア人オセローは、ベニスでは、言うまでもなく、他国人である。肌の色もちがう。彼は黒人である。ムーア人は、人種的には、北西アフリカ人（バーバル人）とアラビア人との混血人種で、純粹のニグロとは異なるが、シェイクスピアの時代のイギリス人はそのようなごまかな判別をしていなかった。'Blackamoor'（≠black Moor）という言葉が一般に黒人をあらわす言葉として用いられていたことから察せられるように、ムーア人とはすなわち「黒人」であった。南の灼熱の太陽の国に住む黒い人々であった。シェイクスピアの時代のイギリス人にとって、ムーア人は、そのつぎに、回教徒であった。異教の民であった。オセロー自身は、（もしわれわれがそのことをとくに問題とする必要があるならば）宗旨を明らかにしていないと言うべきであるが、しかし、彼の生まれた国の宗教は回教であったはずである。もしかりに、イアーゴアがロデリーゴをかついで言ったように（IV. ii. 229-30）、オセローがサイプラスからデズデモーナを連れてムーア人の国モーリティアへ赴いていたとすれば、彼はそこできわめて自然

にアララの神の名を唱えたかも知れぬ。われわれはいたずらに想像をたのしんでいるのではない。オセローの宗教などということに興味を示しているわけでもない。われわれは、オセローという人物には神祕の影が漂っていることを指摘したのである。デズデモーナがオセローのもとへ走ったことを知らされた彼女の父ブラバンシヨールは、まず、自分の娘はオセローが使った何かの魔法か妖術にたぶらかされたのではないかと疑った。ブラバンシヨールのごとき常識人にただちにそのような疑いを起こさせるものがオセローにはあったのである。

まず第一に、オセローの出生がはっきりしない。彼は「自分は王族の出である」(I fetch my life and being/ From men of royal siege) [I. ii. 21—2]と言っているが、どこの国の何という王族の出なのか、はっきりしない。彼はきわめて若いころから両親の膝下を離れて流浪の生活に入ったらしいが、そのような生活に入った事情も明らかでない。彼がブラバンシヨールやデズデモーナに語って聞かせた半生の物語は、冒険と数奇に富んでいるが、それは、中世のロマンスさながらに、時空に関しては空漠としている。彼はいつ、いかにしてベニスに來たのか、どうしてベニスの軍隊の指揮を委ねられたのか、そのようなことは少しもわれわれに告げられていない。彼はベニスにおいてのみならず、彼のいたすべての土地において他国者であった。「ここかしこ定めなくさすらい歩く他国者」(an extravagant and wheeling stranger / Of here and everywhere) [I. i. 138—9]というのが彼の身の上であった。ベニスはオセローの軍人としての力量は高く買った。しかしかれらは彼を同国人と同じようにかれらの社会の中へ迎え入れてはいない。白人の間にただひとりまじる黒人の姿が視覚的に描き出すオセローの孤立は、彼の精神的孤立を象徴している。彼はその精神の奥にわれわれの端倪を拒む暗黒の神祕を蔵した人物としてわれわれの眼にはうつる。彼の黒

い外貌がわれわれと異なるごとく、彼の心の動きもわれわれとは異った動き方をするのではないかという疑いをわれわれはいだく。

オセローがデズデモーナに与えた宿命的なハンカチーフがある。オセローは言う、

あのハンカチーフは私の母があるエジプトの女からもらったものだ。その女は魔法使いで、人々の心をよく読み当てる。その女が母にこう言った、それを持ってゐる間は人にもかわいがられ、私の父の愛を彼女ひとりに集めておくことができるが、もしそれを失ったり、あるいは他人に与えてしまったりすれば、彼女を見る夫の目に嫌気の色がさし、夫の心は新しい女を漁ってそこに情をかけることにならうと。母は臨終の床でそれを私にくれ、やがて私が妻をめとるような日が来たら、それをその女に与えるようにと言った。私はそれとおりにした。だから大事にしてくれ。おまえの目と同じように大切にしておいてかわいがってくれ。なくしたり、人にやってしまったらしたら、それこそどんなことをしても追いつかない重大なものを失うことになるのだから。

The handkerchief

Did an Egyptian to my mother give;

She was a charmer, and could almost read

The thoughts of people: she told her, while she kept it,

'Twould make her amiable and subdue my father

Entirely to her love, but if she lost it

Or made a gift of it, my father's eye

Should hold her loathed, and his spirits should hunt

After new fancies: she, dying, gave it me;

And bid me, when my fate would have me wive,

To give it her. I did so: and take heed on't;

Make it a darling like your precious eye;

To lose't or give't away were such perdition

As nothing else could match. (III. iv. 55—68.)

そのようにすることはありうることをさういふから、デズデモーナに、「オセローは「ほんとうだ」と答え、さらにつきのよう
に言ひ。

あれには魔法が織り込んである。年に一度めぐる太陽の運行をこの世で二百たび数えた老巫女が、彼女に乗り移
った神霊の言葉を語る恍惚のうちにあの縫取りをしたということだ。神前で浄めた蚕が吐く絹糸を集め、死んだ
乙女の心臓から特別の秘法を用いて作った薬液にそれを浸して染めたのだ。

'Tis true: there's magic in the web of it:

A sibyl, that had number'd in the world

The sun to course two hundred compasses,

In her prophetic fury sew'd the work;

The worms were hallow'd that did breed the silk;

And it was dyed in mummy which the skilful

Conserved of maidens' hearts. (III. iv. 69—75.)

オセローは彼の背後に黒い魔法の世界を持っており、その世界はオセローの上にもその影を投じている。ブラバンシヨイが、自分の娘をオセローに奪われたと知ったとき、ただちに、オセローは魔法か妖術を用いたのではないかと疑ったことにわれわれは注意しなくてはならない。ブラバンシヨイは、おそらく、ベニスの市民のうちで、オセローをもっとも個人的に親しく知っていた人物である。彼はしばしばオセローを彼の自宅に招いた。その彼が、右のごとき疑いをただちにいだいたということは、オセローがベニスの日常性からは遠い、ある妖異の世界の人間としてブラバンシヨイに、したがって他の多くのベニス人に、印象づけられていたことを物語るものである。オセローは、ベニスにおいて、言葉のあらゆる意味において、異境の人であった。オセローは、ベニスにあって、別の世界から来た人間であった。後段で明らかにするように、オセローの悲劇の基本的な原因はそこにあった。

オセローは、ベニスにあって、ベニスの日常性に溶け込んでいない。彼はベニスの社会に、外から、彼に与えられた役割の限界を守って、参加している。彼はベニスの社会に対して、外見上、常に一定のポーズを取っている。それは、ベニスに、オセローのすべてではなくてオセローの軍人としての能力だけを受け入れていることと関係することでもあるが、問題の本質は、そのような相対的な関係においてあるのではなく、オセロー自身に即してある。われわれ

れはオセローを軍人と呼んで来たが、軍人という言葉にあまり近代的なひびきがありすぎるとすれば、われわれはここで用語を変えなければならない。軍人というのは、オセローの意識で言えば、英雄である。オセローが、ベニスにおいて、外見上、常に見せているポーズは英雄のそれである。外見上、それはオセローのポーズと見えるけれども、オセロー自身においては、そのポーズはすでに恒常的なものになっており、オセローという人間に深く刻み込まれたもの、すなわち、原義的に理解した場合の彼の character (性格) になっている。オセローは英雄的性格を帯びた人物である。イアーゴが彼に注入したジュラシーという毒液が彼の体内にまわるまで、彼は彼の英雄的性格を失わず、彼が外部に対して常に見せて来た彼の英雄的姿勢を崩さない。ブラバンシヨが率いる捕方にかこまれ、敵味方の白刃がひらめいたとき、オセローが泰然として言う言葉、

Keep up your bright swords, for the dew will rustem.

Good signior, you shall more command with years

Than with your weapons. (I. i. 59—61.)

そのぎらつく刀を鞘におさめろ、夜露に錆びる。ブラバンシヨ閣下、閣下ほどの方は御年功によってお命じあるべく、刀剣を用いるには及びますまい。

は、オセローの本来のスタイルを示す標本としてもここに引用することができる。(この引用文の最初の一行をT・S・エリオットが詩劇の言葉の模範として賞讃したことは有名である。)

オセローが身にそなえたこの英雄的性格と、彼の異国性と、彼が語る冒険と放浪の半生とは、彼をさながら古代叙

事詩あるいは中世ロマンスの中から抜け出て来た英雄のごとき人物にする。デズデモーナをオセローに惹きつけたものも、彼がその身を実現していたロマンティックな英雄性であった。もっと正確に言えば、デズデモーナは彼女自身の英雄性への願望がオセローにおいて実現しているのを見たのであって、彼女にとって、オセローは、彼女がそうありたいと願った自分自身が現実となって存在しているものにほかならなかった。オセローは彼女によって願望された彼女自身であった。デズデモーナの胸に燃えていた英雄的なるものへの彼女の情熱的な願望を無視してデズデモーナの性格を語ることは、それ自身において重大な手落ちを犯すことになるばかりでなく、この劇全体の解釈をあいまいにする。

オセローが怪しげな魔法を用いて自分の娘を誘惑したというブラバンシヨの告訴にこたえて、オセローが、ベニスの公爵をはじめとする高官たちの前で行なった弁明は、それ自身、叙事詩あるいはロマンスの英雄的世界を再現し、オセローの英雄性を鮮明にするものであるが、それは同時にデズデモーナとオセローとの間の結び目の所在をも明らかにしているものである。ブラバンシヨに愛され、しばしばその私邸に招かれたオセローは、乞われるままに、彼の波瀾に富んだ半生を物語った。それは、幼少のころからその日まで、彼がさまざまの土地で戦った危険な戦争や、目を驚かす驚異の国々をさまよった流浪の物語であった。

このような物語を聞こうと、デズデモーナは体を乗り出すようにして真剣に耳を傾けました。しかしいろいろと家事が多く、そのため席をはずすこともしばしばでしたが、彼女はいつもそれを手早くすませ、すぐにもどって来ては、食るように私の話に聞き入りました。私はその様子を見ておりましたが、ある日よい折を見つけて、私

の放浪の生活の一部始終をぜひ詳しく話してくれと彼女の方から熱心にせがむように仕向けました。というのも、彼女はそれを切れ切れには聞いておりましたが、一貫して聞いてはいなかったからであります。私は承知いたしました、若いころ受けた苦しい心の打撃などを語って、しばしば彼女から涙を誘い出しました。私が話し終わると、彼女は私の嘗めた辛酸に同情してしきりに溜息を洩らし、ほんとうにふしぎだ、想像も及ばぬほどふしぎだ、気の毒だ、驚くべきほど気の毒だ、と申しました。いっそ聞かなければよかったですと申しましたが、それでいて、自分もそういう男に生まれてくれればよかったとも申しました。私に礼を述べたあと、彼女はさらにこう言ったのでございます、もし私の友だちで彼女に想いを寄せている男がいるなら、その男にいまの私の話をさせるがよい、それだけで彼女の心は彼のものになるうからと。この言葉に力を得て、私は意中を打ち明けました。彼女は私が冒して来た危険のゆえに私を愛し、私は彼女がそういう私に同情してくれたがゆえに彼女を愛したのであります。私が用いました妖術はただそれだけであります。

This to hear

Would Desdemona seriously incline :

But still the house-affairs would draw her thence :

Which ever as she could with haste dispatch,

She'd come again, and with a greedy ear

Devour up my discourse : which I observing,

Took once a pliant hour, and found good means
To draw from her a prayer of earnest heart
That I would all my pilgrimage dilate,
Whereof by parcels she had something heard,
But not intently: I did consent,
And often did beguile her of her tears,
When I did speak of some distressful stroke
That my youth suffer'd. My story being done,
She gave me for my pains a world of sighs:
She swore, in faith, 'twas strange, 'twas passing strange,
'Twas pitiful, 'twas wondrous pitiful:
She wish'd she had not heard it, yet she wish'd
That heaven had made her such a man*: she thank'd me,
And bade me, if I had a friend that loved her,
I should but teach him how to tell my story,
And that would woo her. Upon this hint I spake:

She loved me for the dangers I had pass'd,
And I loved her that she did pity them.

This only is the witchcraft I have used. (L. iii. 145—69.)

右の引用文中*印を付した箇所「That heaven had made her such a man」には二通りの解釈が可能で、現に二通りの解釈が行われている。その一つは、「神が彼女のために(すなわち、彼女の夫たるべく)そのような男を創造しておいてくれたこと」をデズデモーナの願望の内容とする解釈、もう一つは、「神が彼女をそのような男にしておいてくれたこと(すなわち、彼女がそのような男に生まれていたこと)」をそれとする解釈である。私は後者の解釈を採るものであるが、かりに前者のような解釈に従ったとしても、デズデモーナの英雄性への憧れがそこに含意される点においては変りはない。

デズデモーナは自分を戦雲の地サイブラスへ夫とともに行かせてくれるようベニス当局に歎願して言う。

私がオセローと生活を共にしたいと願って彼を愛しましたことは、乾坤一擲、思い切って運命を選んだこのたびの私の行動によって、世間のみなさまにもはっきりとおわかりいただけるかと存じます。私の心は夫の職業そのものに強く惹かれております。私はオセローという人を容貌ではなく彼の心に見たのでありまして、彼の榮譽と勇壮な行爲とに私の心も運命も捧げました。ですから、みなさま、もし私はあとに残され、蛾もさながらに安閑の日を送り、夫だけ戦場へ赴くということになりますと、私は彼を愛してその妻となった私の権利を奪われるばかりでなく、恋しい夫の留守の間を悲しい思いで耐えねばなりません。どうぞ私も夫と一緒に行かせてください

た。

That I did love the Moor to live with him,
My downright violence and storm of fortunes
May trumpet to the world: my heart's subdued
Even to the very quality of my lord:
I saw Othello's visage in his mind,
And to his honours and his valiant parts
Did I my soul and fortunes consecrate.
So that, dear lords, if I be left behind,
A moth of peace, and he go to the war,
The rights for which I love him are bereft me,
And I a heavy interim shall support

By his dear absence. Let me go with him. (I. iii. 249—60.)

デズデモーナは、やさしく、慎しみ深く、はじらいの多い娘であった。しかし彼女の心は英雄に憧れていた。できることなら、自分が男に生まれて英雄になリたかつた。しかし、それは不可能なことであるから、彼女は英雄の妻となリ、英雄と生活を分け合うことによつて英雄的生活に参加しようとしたのである。オセローとの結婚は彼女に心願の

満足をもたらすものであった。

オセローとデズデモーナとがサイブラス島で再会したとき、オセローが彼女に呼びかけた「おお、私の美しい女武者」(O my fair warrior) [II. i. 184] という言葉や、キャシオーの乱酔につづいて惹き起こされた騒動を叱ったあと、デズデモーナとともにふたたび寢室にもどるときオセローが彼女に聞かせた言葉、「これが軍人の生活だ、安らかな眠りの夢をいつも闘争で破られる」(’Tis the soldiers’ life / To have their balmy slumbers wak’d with strife) [II. iii. 257—8] は、デズデモーナの心をオセローが十分に見ていたことを示すものである。イアーゴのたくらみが利いて、オセローのデズデモーナに対する態度が変わったとき、彼女は、理由はわからぬままに、ふとオセローを恨んだ自分の非を反省するが、そのときの彼女自身の言葉、「ほんとうにだめな武士だわ、この私は」(I am handsome warrior as I am) [III. iv. 151] も、われわれの論点を補強するものである。

五 オセローにおける愛と英雄性との喪失

オセローはデズデモーナの愛をまだ信じていたころ、彼が彼女を愛さなくなったときにはふたたび混沌の世が来ると言った。彼のこの言葉の意味はすでに第一節で考察した。彼がデズデモーナの愛の誠実を疑うようになったとき、彼は現実には混沌の世界に落ちた。彼はデズデモーナの不貞を確信させられたと思ったとき、人事不省に陥ってその場に倒れた (IV. i. 44)。それは、イアーゴの言うとおり、てんかんの発作であったかも知れぬ。しかし、オセローがそこでてんかんの発作に襲われたことの意味は、魔女たちの予言を聞いてマクベスがしばし茫然自失したことや、リ

アがあらゆる夜の荒野で発狂したことの意味と共通するものを持っている。いずれの場合においても、それらの個人の精神の混乱は、それぞれにおいて、それぞれが信じて来た世界の崩壊の知覚に結び付いており、またその崩壊の一部として起こっている。

オセローはデズデモーナの貞操を疑い、二人を結び付けた愛の真実に対する信念を失ったとき、それと同時に、彼の英雄性をも失った。

たとえ全軍の将兵が、工兵隊の土方にいたるまで一人残らず、彼女の美しい肉体を慰みものにしたとしても、そのことを知りさえしなければ、おれは幸福でいられたろう。おお、いまは永遠にさらばだ、あの平穩の心よ！

満ち足りた心よ、さらば！ 軍帽に羽根が揺れる大部隊よ、野心を美德とする壮大なる戦争よ、さらば！ おお、さらば！ いななく軍馬、唳々たるラッパ、士気をふるい立たせる太鼓、耳を突きさす笛、壮麗な軍旗、その他、輝やかしい戦争の誇り、華麗、栄誉、一切のものよ、さらば。荒々しい咽喉の唸りに雷神ジュピターの怒号を模する必殺の巨砲よ、おまえたちともさらばだ！ オセローの天職は去った！

I had been happy, if the general camp,

Pioners and all, had tasted her sweet body,

So I had nothing known. O, now, for ever

Farewell the tranquil mind ! farewell content !

Farewell the plumed troop, and the big wars,

That make ambition virtue ! O farewell !

Farewell the neighing steed, and the shrill trump,

The spirit-stirring drum, the ear-piercing fife,

The royal banner, and all quality,

Pride, pomp and circumstance of glorious war !

And, O you mortal engines, whose rude throats

The immortal Jove's dread clamours counterfeit,

Farewell ! Othello's occupation's gone ! (III. iii. 345—57)

天職は去り、英雄性を喪失し、ジェラシーのとりことなり、復讐の鬼と化したオセローは、もはや黒い怪獣でしかない。オセローは、さきほかにキャシオーが起こした乱闘騒ぎに寢室から起き出て来たとき、まさに爆発しようとする怒りをやっとなげき抑えた。

もう我慢がならぬ、おれの血がおれのいっそう安全な導き手（理性）を支配しはじめ、激情が、おれの最善の分別を黒くにごして、先導者になろうとしている。

Now, by heaven,

My blood begins my safer guides to rule;

And passion, having my best judgement collied,

Assays to lead the way. (II. iii. 204—7.)

ここでわれわれが予感した黒人オセローの危い心のバランスは、ジェラシーの毒が彼の心にまわるとともに崩れた。彼は黒い顔に緑色の眼を燃やし、地獄から復讐の鬼を呼び立て、「おお、血だ、血だ、血だ！」(O, blood, blood, blood!) [III. iii. 451]と叫ぶ狂暴な野獣と化した。人間の獣への転落、人間性の獣性への変化は、『オセロー』という作品において、最初から低い地鳴りのように響いていたテーマ音であった。それはいま怒濤のごとく轟いてあたりに鳴りひびくものとなった。

六 オセローの宿命的弱点

オセローはデズデモーナに対する彼の愛が消えるとともに、彼のこの世での仕事(“Othello's occupation”)も消え去ったことを知った。彼が天職と心得るものを失い、彼の英雄性を失ったのちのオセローは、物理的には一人の黒人として残るが、そのときのオセローは、オセローの眼から見るとき、もはや「オセロー」ではない。そのときに「オセロー」は死ぬのである。オセローの眼にオセローを「オセロー」たらしめ、その真实性を彼に保証したものは、オセローとデズデモーナとの間の愛の真实性であった。デズデモーナがオセローを愛していることは、オセローに「オセロー」の真实性を信ずる根拠を与えた。「オセロー」の实在を、「オセロー」のいのちを、オセローに信ぜしめたのは、デズデモーナの彼に対する愛であった。

おれに苦痛の試練を与えようとの天意ならば、ありとあらゆる苦しみや辱しめを雨あられとこの頭上にくだし、

おれを貧困の沼に首まで浸して喘がせ、この身を虜囚として一生の希望を奪ってくれても、おれは心のどこかの隅に忍耐の一滴を見出したであらう。それが、ああ、じっとして動かぬ時計の針のような世人の嘲りの後指にいつまでもさらされて、進退のかなわぬ身にされるとは！ いや、それだって耐えて耐えられぬことはない。そうだ、それもできる。しかし、おれが心をあずけたところ、生きるか死ぬか、そこにおれのいのちを託したところ、おれのいのちの川が流れもすれば涸れもする源の泉。そこから放逐されるとは！ あるいは、そこを汚水の溜りとし、醜悪なひきがえるがつるんで子を生む場所にしておくとは！ こうなったらかまわぬ、ばら色の唇も初々しい忍耐の天使よ、ここにおいてその顔色を一変し、地獄の悪鬼の形相に変われ！

Had it pleased heaven

To try me with affliction ; had they rair'd

All kinds of sores and shames on my bare head,

Steep'd me in poverty to the very hips,

Given to captivity me and my utmost hopes,

I should have found in some place of my soul

A drop of patience ; but, alas, to make me

A fixed figure for the time of scorn

To point his slow unmoving finger at !

Yet could I bear that too ; well, very well :

But there, where I have garner'd up my heart,

Where either I must live, or bear no life ;

The fountain from the which my current runs,

Or else dries up ; to be discarded thence !

Or keep it as a cistern for foul toads

To knot and gender in ! Turn thy complexion there,

Patience, thou young and rose-lipp'd cherubin, —

Ay, there, look grim as hell ! (IV. ii. 47—64.)

もし、オセローが信じ込まされたように、デズデモーナがキャシオーと不義をしたとすれば、彼女は他の男とも同じことをしているかも知れず、あるいは将来するかも知れない。オセローはデズデモーナを売女と罵った。キャシオーと不義を働いたから彼女は売女なのではない。彼女は売女だからキャシオーと不義を働いたのである。彼女はそれが、がによって売女だとすれば、彼女がオセローと結婚したことも、彼女のその同じさが、に由来したことではないのか。彼女の本性にそなわる淫奔で異常な情欲がオセローの黒い肉体を求めたにすぎないのではないか。オセローは、デズデモーナの愛を疑ったとき、彼女についてイアーゴーがロデリーゴーに述べたのと同じような考え方に陥った。

いいか、はじめ彼女がムーアにがむしゃらに惚れたってのも、何のことはない、夢みたいな嘘っぱちの大ばらを

聞かされたからにすぎない。だとすれば、口先のお喋りがすてきだなどと言って、彼女いつまでもやつに惚れて
いるだろうか。御賢察を待つまでもない話だ。彼女だって目の保養がほしい。ところで、悪魔の御面相を眺めた
ところでどんな楽しみが得られるというのだ。情欲の血が例のいたずらごとにも倦きてきたとき、もう一度それ
を燃え立たせ、新鮮な食欲をふたたび湧き立たせるためには、きれいな顔立ちとか、年令、風習、美しさの調和
がどうしても必要だ。そのどれ一つとしてムーアにはない。さて、こうした必須不可欠の合致点がないとなると、
彼女は自分のしなやかな若さが不当に使われていることに気付き、食ったものを吐き出したくなり、食欲はなく
なり、あのムーアなんか見るのも嫌だということになる。ほかならぬ人間の本性が彼女にそう教え、どうしても
何か代わりのものをさがさないとはいられない。 . . .

Mark me with what violence she first loved the Moor, but for bragging and telling her fantastical lies:
and will she love him still for prating? let not thy discreet heart think it. Her eye must be fed; and
what delight shall she have to look on the devil? When the blood is made dull with the act of sport,
there should be, again to inflame it and to give satiety a fresh appetite, loveliness in favour, sympathy
in years, manners and beauties; all which the Moor is defective in: now for want of these required
conveniences, her delicate tenderness will find itself abused, begin to heave the gorge, disrelish and abhor
the Moor; very nature will instruct her in it and compel her to some second choice. (II. i. 224—39.)

イアーゴは男女間の愛を肉欲という言葉でしか考えないから、彼の考える愛の消長や変化もまたもっぱら彼のそ

いう見地から計測されるものである。

彼女は若い男へ鞍替えするにきまっている。彼女がオセローの肉体に飽きたときに、彼女は自分のした選択のあやまちに気付くだろう。彼女はかならず鞍替えする、かならずだ。

She must change for youth. When she is sated with his body, she will find the error of her choice. She must have change, she must. (I. iii. 55—8.)

という考えは彼が最初から口にしていたものである。彼はまた、「ムーア人というやつは気が変わりやすい。……いまローカストの実のようになまいと言った食いものを、たちまち、せんぶりのように苦いと言いつ連中だ」(These Moors are changeable in their wills... The food that to him now is as locusts as locusts shall be to him shortly as bitter as colquintida.) (I. iii. 51—5) とも言った。イアーゴーによれば、オセローとデズデモーナとの結婚は「宿なしの野蛮人とする賢いベニス女との間の儀式とゆるい誓約」(sanctimony and a frail vow betwixt an erring barbarian and a supersubtle Venetian) (I. iii. 61—3) で形式的に結ばれ、実質的には両者の肉欲で結ばれているものということになる。そして、オセローの肉体はデズデモーナの肉欲を長く満足させておくことができないばかりでなく、やがて逆に彼女に嫌悪の情を催させるものになるから、彼女はそのときかならず他の男を求めることになるというのが、イアーゴーがロデリーゴに言い聞かせていた理屈である。この理屈はオセローに対してもイアーゴーが用いたものである。しかし、この点について叙述を進める前に、ここでとくに注意を払っておきたいことがある。

オセローはデズデモーナの不貞を彼に信ぜしめるに足る証拠を提出することをイアーゴに求めた。オセローにデズデモーナの不貞を確信させるべき揺ぎなき証拠とは、実は、イアーゴの言うとおり (G. II. iii. 91-9)、「デズデモーナが他の男と不義をしている現場をオセローが彼自身の目で直接見ることによってしか得られないはずのものである。イアーゴの言うとおり、そのような証拠は得ることがきわめて困難であるだろうが、それよりも、オセローがしたように、そのような証拠を求めることを当事者が忌避したならば、あと得られる証拠というのは、すべて情況証拠でしかあり得ない。真の確証は得られないが、

つきつめて行けば真実の戸口へじかに通ずるといふような強力な情況証拠でもし御満足が行くのでしたら、そういうものでしたら得られぬことはありません。

If imputation and strong circumstances,

Which lead directly to the door of truth,

Will give you satisfaction, you may have't. (III. iii. 406-8.)

と云うイアーゴはこの場合ほんとうのことを言っている。しかし、情況証拠はいくら集めてもやはり情況証拠にすぎないのであって、情況証拠と真実とは決して直結しない。情況証拠にもとづいてわれわれがあることを真実だと断定したときには、われわれはかならず跳躍をしている。その跳躍の原動力は、実は情況証拠などというものとは本質的に異なるもの、われわれの信念である。「真実の戸口」までは情況証拠によって辿りつくことができる。しかし、われわれに敷居をまたがせるものは、われわれの信念である。イアーゴが「情況証拠」としてもたらしめたものからオ

セローがデズデモーナの不貞を信じたのは、まさしく彼がそう「信じた」のであって、オセローは信ずるということにおいてあやまちを犯した人間である。すでに述べたように、デズデモーナが不貞ではない、という積極的な証拠は、實際上、得られないものである。逆に、デズデモーナが不貞であるかも知れぬという疑いを生ぜしめているものとしては情況証拠しかない。一切の決着はオセローの信念にかかった。そのときデズデモーナは不貞であると信じる形でオセローに敷居を越えさせることに寄与した一つの根本的な条件は、彼がベニスにおいて他国者であったということである。同国人（もっと一般的に言えば、同一の共同社会の成員たち）の間ではある程度の共通の理解と相互の信頼が暗黙のうちに存在している。同国人の間には、いちいち説明を要せず、証拠を問わない領域がある。他国人であるがゆえに同国人の間に存在するこの特殊領域に参入できない場合もあるが、もっと大切なことは、他国人であるがゆえにその領域に参入できないのではないかと疑いが他国人には絶えず存在するということである。同国人の間では存在しうる暗黙裡の理解と信頼、あるいはもつと根本的には、直観的認知が、異国人間では役立たない場合があり、また役立たないのではないかという疑いが常にある。オセローは、デズデモーナを理解し、信頼し、愛したのちでも、もし、彼女の本性を誤認してはいないかと改めて問われれば、彼が彼女に対して他国人であるかぎりにおいて生ずる不安から、それを絶対に誤認してはいないと断言できない弱点を必然的に持っている。オセローはベニスにおいて他国者であったばかりではない。彼は少年のころからの流浪者であって、実ほどの共同社会にも本来的に所属したことがなく、彼は常に外来者であった。まさしく、天涯の孤児であった。『オセロー』には、ヘンリー・ジエイムズがとくに興味を持った問題が、もっと一般化された形で含まれている。オセローは、どこの社会に対しても十全的に所

属せず、どここの社会に対しても外来者であった人間が負う悲劇的宿命に殉じている。オセローの危機はデズデモーナを信ずるか、イアーゴを信ずるか、そのいずれかに決定することの中にあつた。そのとき、彼はデズデモーナではなく、イアーゴを信じたことにおいて、彼の決定的なあやまちを犯した。彼がそのあやまちを犯したのは、彼が証拠の名で客観的に提出されるものなどは実はまったく無力であるはずのものについて証拠を求めたからである。証拠が役立つかも知れないのは信念が役立たなくなったときである。オセローが彼の信念を維持することができなかつた最大の理由は、イアーゴの持ち出した「情況証拠」が彼の信念を動揺させるほどに強力であつたからではない。むしろ逆であつて、オセローはデズデモーナに対する彼の信念を徹底的に堅持するに必要な基盤の一部に宿命的な弱点を持つていたがゆえに、イアーゴの出した「情況証拠」が彼の眼に強力に見えたのである。デズデモーナは、オセローが、彼女に対してどんなに変わった態度を取つても、決してオセローの彼女に対する愛と誠実とを疑わなかつた。むしろ、オセローを変えてしまった原因が自分の中にあるのではないかと、もっぱら自分を反省した。デズデモーナはオセローに対して終始不動の地点に立ちつづけた。ちょうどコーデイリアがリアに対して終始不動の地点に立ちつづけたのと同じである。真実とは絶対的なものであるはずである。

イアーゴはオセローにデズデモーナに対する疑念を注入しようとしたとき、オセローのもつとも根本的な弱点にまず最初の一槍を突き入れた。

私と同国人の気風をよく知っております。ベニスの女たちは夫には絶対に見せられないいたずらを神様には憚らずに見せるといふところがあります。彼女たちの最高の道徳は、それを犯さないことではなくて、それを知

られないようにしておくことなのです。

I know our country disposition well;

In Venice they do let heaven see the pranks

They dare not show their husbands; their best conscience

Is not to leave't undone, but keep't unknown. (III. iii. 201-4.)

イアーゴウがその次に言ったことは、デズデモーナもベニスの女の例外ではなさそうだ、いや、イアーゴウの言う意味においてもっともベニスの女らしい女かも知れないということである。

奥さんは、閣下と結婚なさるときに、お父上の目を欺いた方です。閣下のお顔を見ていかにも恐れおののいておられるように見えたときが、実は閣下のお顔にいちばん恋着しておいでするときでした。……まだお若いのに、お父上の目をとことんまてくらすために、あんな見せかけがおできになった方で、お父上の方ではそれをてっきり妖術のためだと思ひになられたくらいでした。

She did deceive her father, marrying you;

And when she seem'd to shake and fear your looks,

She loved them most. . .

She that, so young, could give out such a seeming,

To seal her father's eyes up close as oak——

He thought 'twas witchcraft. (III. iii. 206—12.)

イアーゴのこれらの言葉は、デズデモーナを連れ去るオセローに彼女の父ブラバンシヨが最後に言った不吉な言葉、

その女には気をつけなされ、ムーア殿、目がおありならばな。父親を欺いた女だ、やがてはそなたをもかも知れぬ。

Look to her, Moor, if thou hast eyes to see:

She has deceived her father, and may thee. (I. iii. 293—4.)

と重なり合つてオセローの耳にはひびいたはずである。

オセローが他国者であることから来る彼の弱点に最初の一槍を突き入れたイアーゴは、次にオセローの第二の弱点を攻める。オセローのこの第二の弱点は、オセロー自身が意識していたものである。なぜならば、この点はオセローの方で先に言い出すからである。イアーゴが最初の槍を引込めた後、「だがしかし、どうして自然がその本性にそむいて——」(And yet, how nature erring from itself——)と言い出したのはオセローである。イアーゴはすかさずこれに応ずる。

いや、問題はそこです。たとえば、遠慮なく申し上げますが、同じ国の生まれ、肌の色も同じ、身分も同じという男たちからの数ある結婚の申込みに見向きもしないこと、万物みな同類を慕うのが自然であるのに、です。ふん！　そういう女の好き心は、こいつは臭いぞと誰でも思います。何か歪んで厭らしいものがあります。考え方も不自然だ。いや、お許しください、私は何も奥様がそうだとはっきり申し上げるつもりはございません。ただ、

奥様のお氣持が静まって、正常な分別を取り戻されたとき、ふと閣下を同国の優男とくらべて、あるいは後悔な
るやうなことがないとも言えないのではないかと思つただけです。

Ay, there's the point : as—to be bold with you—

Not to affect many, proposed matches

Of her own clime, complexion, and degree,

Whereto we see in all things nature tends—

Foh ! one may smell in such a will most rank,

Foul disproportion, thoughts unnatural,

But pardon me ; I do not in position

Distinctly speak of her ; though I may fear

Her will, recoiling to her better judgement,

May fall to match you with her country forms

And happily repent. (III. iii. 228—38.)

デズデモーナの歪んだ異常な情欲が彼女に彼の黒い肉体を求めさせたというイアーゴアのこの暗示は、オセローには
耐えがたく、彼はそれを、それを口にしたイアーゴアもろともに一旦は払いのける。しかし、この恐ろしい暗示はオ
セローの中に沈澱する。イアーゴアを一旦退けたあとで、オセローはやはり自分の肉体的特徴のいくつかを彼のひけ

目として改めて意識せざるを得ない。

多分、おれの肌が黒いからであろう、優男のやわらかな物腰を持たぬからであろう、あるいは齢も峠を越した—
と言つてもそれほどではないが—そういうことからであろう、彼女の心がおれを去ってしまったのは。

Happily, for I am black

And have not those soft parts of conversation

That chamberers have, or for I am declined

Into the vale of years,—yet that's not much—

She's gone. (III. iii. 263—7)

オセローが彼とデズデモーナとの関係を肉体的感覚の次元でしか考えなくなったとき、そのとき彼はイアーゴの手
中に転げ落ちたのである。

七 オセローの復元と死

前節の最後に引用した言葉につづけて、オセローは次のように言った。

おれは欺かされている。おれの救いは彼女を嫌悪することではなければならぬ。

I am abused ; and my relief

Must be to loathe her. (III. iii. 267—8)

まさにそのとおりである。彼がデズデモーナに欺かれたと信じ、そして彼女を嫌悪することができたならば、彼はジェラシーの苦患からは免れたであろう。イアーゴが言ったように、ジェラシーの苦患は、疑いつつ愛し、愛しつつ疑うところに生ずる。疑うと同時に愛着を断てば、ジェラシーの苦患は生じない。嫌いな女が他の男と何をしようが、こちらは恬然としていられるはずである。オセローはデズデモーナを疑いながら、彼女に対する愛をついに断てなかつた。だから彼はデズデモーナを殺さなければならなかつたのである。彼は、最後に一切の真相を知って自殺する寸前、自分のことを、「賢く愛さず、あまりにも愛しすぎた男」(one that loved not wisely but too well)と言つた。彼がデズデモーナを愛しつつ疑つたのは、根本的には彼の無知に原因があり、「賢明」ではなかつた。彼がデズデモーナを疑つて彼女を殺してしまつたのは、彼が彼女を愛しすぎたからである。彼の彼女に対する愛は、彼女を疑つても彼女をそのままに放置しておくにはあまりにも強く深かつたのである。彼の彼女に対する愛が、そこに妥協を許す程度のものであつたならば、彼は彼女を殺す必要を感じなかつたであろう。しかし、オセローは愛の純粹主義者であつた。

オセローはデズデモーナを愛しつつ殺した。あるいは、愛するがゆえに殺した。いや、オセローが殺したのは、デズデモーナではなく、デズデモーナに棲むと彼が誤信した淫乱のさがであつた。彼がデズデモーナを殺すことを決意して、最後に彼女の寝室に入って来たとき、彼の心は冷静であつた。彼がデズデモーナのへやに入り、彼女の寝台へ近づきながら最初に言う、「It is the cause, it is the cause, my soul.」(V. ii. 1)という言葉の意味は十分に明確ではなく、従来さまざまな解釈が行われているが、私は、「the cause」はオセローがデズデモーナに棲むと誤信した淫

乱のさ^がのことであると解釈する。オセローは殺意を抱いてデズデモーナの寝室に入つて来た。しかし彼が殺さねばならぬと思つているのはデズデモーナという人間ではなく、デズデモーナに棲む淫乱のさ^がなのだ、とオセローはこの言葉で言つたのであると私は思う。オセローは彼が誤信したデズデモーナの淫婦性をあからさまに口に出して言うにはあまりに彼女を愛しすぎていた。オセローはデズデモーナの寝台に近づきながら、自分は自分を裏切つたデズデモーナに個人的な復讐をしようとしてゐるのではないと自分に言いきかせてゐる。彼は、彼の意識において、いまや普遍的正義の執行者になつてゐる。彼は正義の女神に代わつて、不正の巢源を絶とうとしてゐる。彼はデズデモーナの雪白の肌を血で汚すことも刀で傷つけることも欲しなかつた。「だがしかし彼女は死なねばならぬ、死なねば彼女はさらに多くの男を裏切るであらう」(Yet she must die, else she'll betray more men.) [V. i. 6.]。デズデモーナに接吻したオセローの「ああ、この息のかぐわしや、正義の女神もその剣を折りかねぬー」(Ah, balmy breath, that dost almost persuade / Justice to break her sword.) [V. i. 16-7.]とどう言葉も、復讐としてではなく、正義の名においてデズデモーナを殺害したオセローの意識をあらわしてゐる。

オセローによるデズデモーナ殺害は、イアゴの妻エミリアによつて最初に発見される。そのときはまだデズデモーナに虫の息があつた。一体、誰がこんなことをしたのかと問うたエミリアに、デズデモーナは、

誰でもありません、私自身です。さようなら。親切だった私の旦那さまによろしく。ああ、さようなら！

Nobody ; I myself. Farewell :

Commend me to my kind lord : O, farewell ! (V. ii. 224—5.)

と答えて死んで行く。デズデモーナはついにオセローに対する彼女の絶対的な愛を完うした。相手の変化に応じて変わる愛は相対的な愛でしかない。デズデモーナのオセローへの愛は、絶対不動の愛であった。彼女はオセローに一度も抗議せず、弁解せず、彼を疑わず、恨まず、非難せず、憎まなかった。彼女はオセローに殺されながら、彼に彼女を殺させたのは自分自身であると思っていた。デズデモーナは、何ものにも侵されない愛の真実の存在を証明した。

デズデモーナへの愛を失うと同時に彼の英雄性を失ったオセローは、デズデモーナの愛の真実を、したがって、彼女の彼女に対する愛の妥当性を、深い眼でふたたび確認しえたとき、彼はふたたび彼の英雄性を取り戻した。彼が最後に語る言葉は、彼が最初に語っていた言葉と同じようなスタイルを持つ、英雄的な言葉に戻っている。惨事のあと、オセローをひとり残して立ち去ろうとする人々を彼は呼び止めて言う。

しばらくお待ちを。行かれる前に一言、二言申し上げたいことがあります。私はお国のために多少のお役に立ってまいりました、それはお国の方もご存じです。そのことはいまさら何も申しますまい。どうか、書面でこの不幸な出来事を報告される際には、この私をありのままにお伝えいただきたい。一つとしてお庇いくださるには及ばず、また悪意で曲げてくださらぬよう。ただこう伝えていただきたい、賢く愛さず、あまりにも愛しすぎた男だったと。たやすくは猜疑の心などは起こさぬ男だったが、他人にたくまれて、極度に混乱してしまつたと。無知なインディアンよろしく、自分の一族すべてよりも貴い真珠をわれとわが手で投げ捨てた男だったと。かつて心控けて涙を流したことなどなかった男だが、いまは感動して、樹液をしたたらせるアラビアのゴムの樹のように潜然と涙を流していると。そう書いてください。それからもう一言、あるときアレッポの町で、ターバンを巻

いたトルコのならず者が、メニス人に暴行を働き、この国をあしざまに罵っていたとき、私はその外道の犬の襟首をひつとらえて、一寸して、メニスに刺し殺したと。【オセロー、みずからを刺す。】

Soft you ; a word or two before you go.

I have done the state some service, and they know't.

No more of that. I pray you, in your letters,

When you shall these unlucky deeds relate,

Speak of me as I am ; nothing extenuate,

Nor set down aught in malice : then must you speak

Of one that loved not wisely but too well ;

Of one not easily jealous, but being wrought

Perplex'd in the extreme ; of one whose hand,

Like the base Indian, threw a pearl away

Richer than all his tribe ; of one whose subdued eyes,

Albeit unused to the melting mood,

Drop tears as fast as the Arabian trees

Their medicinal gurn. Set you down this ;

And say besides, that in Aleppo once,

Where a malignant and turban'd Turk

Beat a Venetian and traduced the state,

I took by the throat the circumcised dog,

And smote him, thus. [*Stabs himself.*] (V. ii. 338—56.)

オセローの最後の言葉は「自分を美化することであると云い、人間普通の弱点である『ボヴァリスム』(“bovarysme”)、*「おのれをあるがままに、なほよく見ようとする人間の意志」*(“the human will to see things as they are not”)をいれ、おのれをしくちらけ出しているものを読んだことがない」と言った(F. S. Eliot: “Shakespeare and the Stoicism of Seneca”)。また、F・R・リーヴィスは、「このオセローについて『自己劇化』(“self-dramatization”)と云うような言葉を用い、オセローはおのれの胸に剣を突き立てたとき、『彼の意識的な勇氣の最高の瞬間』(“his supreme moment of deliberate courage”)を思い出し、それを再演しているのだと云う見解を示した(F. R. Leavis: “Diabolic Intellect and the Noble Hero: or The Sentimentalist's Othello”)。最後の瞬間にオセローが自己欺瞞を行なったとか、あるいは自己を理想化する演技をしたとかいう、このような説に私は賛同できない。オセローがジェラシーに狂ったときに見せた彼の荒々しい蛮性ではなく、デズデモーナとともにわれわれも知っている彼の高潔な英雄性が彼の本質であったと見るべきである。オセローは最後に彼の本性に復帰したと

見るべきである。彼の最後の行動は自己欺瞞でも演技でもない。彼はデズデモーナの眞実性をふたたび信じ得たとき、彼の本性である高貴な英雄性を取り戻したのである。彼がデズデモーナに与えた不正なる正義の償いとして彼に支払えるものはや彼の死しかなかった。彼はデズデモーナの眞実性をふたたび確信して死ぬことができた。彼が自分のいのちを断つ前に潜然として流した涙を、ドーウァ・ウィルソンが言うように、深い喜びの涙であったとするだけではまだ足りない。それは、得たものとそれを得るために支払った代価との正確な均衡の上に立つ、悲喜分ちがたき人間の極情に発しているものであると私は信ずる。(一九六七・三・二四)